

外国人のための日本語教科書 『おいでませ山口』の歩みと今後の課題

林 伸 一

1、はじめに

外国人のための日本語教科書としては『みんなの日本語』（スリーエーネットワーク編）のシリーズが絵教材や漢字練習帳も揃っていて定評がある。海外の英語圏学習者向けには『ジャパニーズ・フォー・エブリワン（Japanese for Everyone）』（学習研究社）などが知られている。そのほかにも目的別、レベル別に様々な日本語教科書が市販されている。

『おいでませ山口』は、山口県内に住んでいる外国人を対象に制作された日本語教材であるが、その作成の経緯について振り返ると作成するきっかけとなった契機、動機としては、次の点が挙げられる。

- ① 市販の日本語テキストは、東京中心の内容が多く、地方の実情と合わない場合が多い。たとえば、地名や駅名など、また地下鉄など山口県にはない交通手段の乗り方などが示されている。教室で学んだことがそのまま実生活の中で使える実用的なテキストを作成したかった。
- ② ボランティアの日本語クラスでは、市販のテキストが無断でコピーされ、配布されている場合が多いので著作権侵害の恐れがある。また、異なるテキストをいろいろ使用するため文法用語など統一性がなく、学習者が混乱する恐れがある。
- ③ 地方の実情に合った内容のテキストを無料配布できるようにしたかった。ボランティアの日本語教室では、市販のテキストを購入するだけの経済的な余裕のない学習者もあり、教える側も手弁当のボランティアが多いため、スポンサーをさがして無料配布テキストをつくる必要性があった。
- ④ 山口県内に6箇所ほどあるボランティアの日本語教室がそれぞれ独自に活動している状態であったが、共通の日本語教材を媒介に連携がとれるようなネットワークをつくりたかった。

ローカルな教材を作成しようとするプロジェクトを最初に提案したのは、大学の日本語教員と日本語のボランティア・スタッフであった。地域性ということに重点を置

くのか、市販のテキストのように汎用性に重点を置くのかという点で、議論があった。

地域性を反映し、重点を置いたところとしては、地名、駅名、店名、地図、電話番号などを実在のものにしたこと、方言解説ページ、地域の著名な人物紹介、スピーチ・コンテスト出場の勧め、病院や美術館などの情報、ゴミの出し方など生活便利帳的な要素をできるだけ盛り込むように工夫した点などである。汎用性を重視し、重点を置いたところとしては、易しいものから難しいものへと学習項目の配列に無理がないように配慮した点である。

作成期間は、最初の版は1年ほどかかったが、その後の改訂作業は、それぞれ1～2か月ほどであった。教材作成の提案者が作成作業にも関わり、各巻ごとの作成に関わった人数としては、内容作成や執筆など作成に直接関わった者、約20名、写真提供や翻訳・イラストなど間接的に協力してくれた人、約10名であった。

2、『おいでませ山口』の特色

『おいでませ山口』の内容や構成は、『ジャパニーズ・フォー・エブリワン』（学習研究社）を参考にした。従来の文型積み上げ式テキストに比べて、より機能（function）と場面が重視されているからである。

普及型の市販教材と作成された『おいでませ山口』シリーズとの違い、こだわった点など、その特徴を整理すると、次の五項目にまとめられる。

- ① 語彙や表現の拡大と整理のためマインド・マップ（mind map：意味地図）を多く用いている点が最大の特色である。それは、語彙の整理と拡大、品詞の整理と文型練習のためなど活用できる範囲が広いが、特に概念（notion）の整理に役立つ。機能を重視した教科書はあるが、概念重視の教科書は少ない。
- ② 10課構成で、ボランティア日本語教室の一期10回～12回で一分冊が終われるようにしている。制作にあたっては、各課の担当ページをできるだけ均一化し、情報ページなどを各課末に取り入れる形がとられている。『おいでませ山口』1～4の各巻ともに全体で10課構成としたのは、日本語教室が一期あたり十数回開講されており、一回一課を目安に授業が進めやすいとの判断からである。
- ③ 絵画的な説明と絵画的記憶のためにイラストや絵、写真をできるだけ多く盛り込んだ。初級学習者には、映像的な説明が有効であるためである。
- ④ 地域の生活情報などできるだけオーセンティック（authentic：本物の）教材にするため実物の宅急便の申込票などを用いた。その他、山口ゆかりの人物や文化紹介、方言解説などを盛り込んでいる。地域密着型のテキストにしたかった。

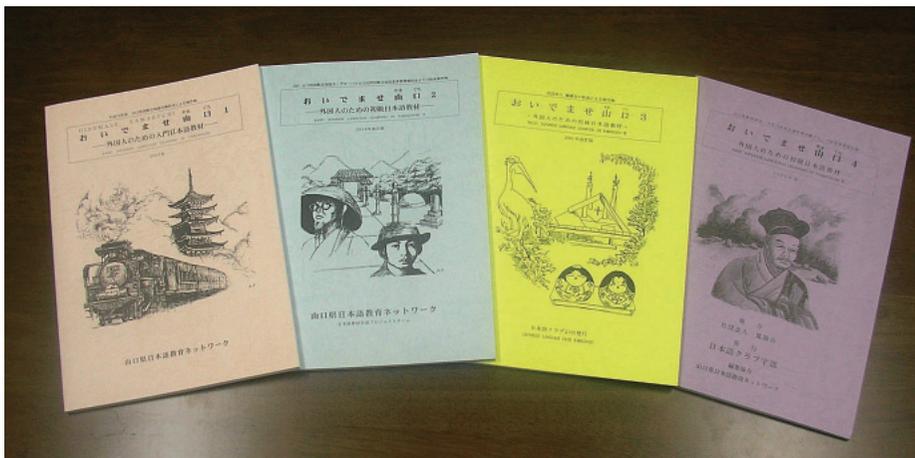
- ⑤ ひらがなやカタカナなどの文字練習、マインドマップ、練習問題等への学習者の書き込み式の練習帳の機能を持たせている。日本語のリテラシー（literacy：読み書き能力）への配慮からである。
- ⑥ 本文会話、新出語などに外国語の訳を付けている。英語は各課ごとに、中国語・韓国語（ポルトガル語は第1分冊のみ）は、巻末に訳を付けている。

『おいでませ山口』を作成するために、付帯的に他に助力や協力をお願いしたのは、付録ページの執筆依頼、翻訳の適否の判定、新聞や雑誌記事の提供、中原中也記念館への内容確認依頼などである。

『おいでませ山口』では、説明文や解説文に学習者の母語（翻訳）を用いていないが、本文会話と新出語には英語、中国語、韓国語などの訳を付している。それは、日本語教室で教える際に説明に時間をかけるよりも練習に時間を使いたい、本文や新出語彙の母語があると学習者が安心するなどの理由からである。また、教える側が学習者の母語にも関心を持つようになることを期待してのことで、教える側と学ぶ側を固定するのではなく、交換レッスンの可能性も含んでいる。指導する人のためのマニュアルや手引きとしては、『おいでませ山口』1～3の巻末には、指導の手引や解説のページをつけている。

1999年に教師用として『ボランティア日本語教師養成ハンドブック』（全151頁、一冊）が発行され、それが翌年の2000年に改訂され、『しあわせます山口1ーボランティア日本語教師養成ハンドブッカー』（全152頁、一冊）として発行された。

『おいでませ山口』の最大の特徴は、マインド・マップの活用であるが『おいでませ山口』2には、次頁のような「ごみマップ～宇部市の場合～」が掲載されている。



『おいでませ山口』1～4（2008年11月3日現在）

ごみマップ～宇部市の場合～



<ごみのQ&A>

<p>Q: 燃やせるごみの日は、週 2回ですか。 A: いいえ。2回じゃなくて、週 3回です。</p>	<p>Q: あした、古いかさを出してもいいですか。 A: いいえ。あしたは燃やせるごみだけです。</p>
---	--

※for teachers 上の会話例を参考に、各地域のごみ収集に合わせて会話練習をしてみてください。

Vocabulary

Expressions (表現・ひょうげん) 毎月(まいつき) 1回(かい) once a month 週(しゅう) 2回(かい) twice a week

『おいでませ山口』を使う人のための勉強会やワークショップなどとしては、日本語ボランティア養成講座一期7回春期（5月～7月）秋期（10月～11月）が、山口市内（サンフレッシュ山口）で開催されている。

3、『おいでませ山口』の歩み

作成された『おいでませ山口』のシリーズは、市販されてはおらず、以下の表1に示す14団体からの助成を得て14年間発行し続けている。作成費の種類としては、公的な助成金、民間の助成金、国際交流協会の事業費からの助成金のほかに自己負担として、ボランティア養成講座の積立金や大学からの助成、大学の同窓会からの助成などがある。

表1 『おいでませ山口』の歩み

	テキスト名	発行主体	助成団体等
1994	山口で学ぶ日本語～入門編～	JALT山口支部 日本語教育部会 (注1)	(財)山口県文化振興財団
1994	山口県で学ぶ日本語～入門編～	JALT山口支部 日本語教育部会	(財)言語教育振興財団
1995	山口県で学ぶ日本語～練習帳～	JALT山口支部 日本語教育部会	(財)山口県国際交流協会
1996	おいでませYAMAGUCHI	JALT山口支部 日本語教育部会	山口市 山口市国際親善市民の会
1996	続おいでませ山口	JALT山口支部 日本語教育部会	山口市国際親善市民の会 日本語クラブ山口
1997	おいでませ山口～外国人のための入門日本語教材～	JALT山口支部 日本語教育部会	日本語クラブ山口 日本語クラブ宇部
1997	おいでませ山口～外国人のための入門日本語教材～	JALT山口支部 日本語教育部会	(財)山口県教育財団・ 教育振興活動支援事業
1997	続おいでませ山口～外国人のための初級日本語教材～	JALT山口支部 日本語教育部会	(財)やまぐち女性財団・ 女性の社会参加活動支援事業
1998	おいでませ山口～外国人のための入門日本語教材～	JALT山口支部 日本語教育部会	(財)山口県教育財団・ 教育振興活動支援事業
1998	続おいでませ山口～外国人のための初級日本語教材～	JALT山口支部 日本語教育部会	山口県日本語教育ネットワー ク
1999	おいでませ山口～外国人のための入門日本語教材～1999-2000年版	日本語クラブ宇部	宇部東ロータリークラブ
1999	おいでませ山口2～外国人のための初級日本語教材～1999-2000年版	JALT山口支部 日本語教育部会	山口県日本語教育ネットワー ク
1999	おいでませ山口3～外国人のための初級日本語教材～	日本語クラブ山口	(初版発行)
2000	おいでませ山口1～外国人のための入門日本語教材～2001年版	JALT山口支部 日本語教育部会	萩ライオンズクラブ
2000	おいでませ山口3～外国人のための初級日本語教材～2000-2001年版	日本語クラブ山口教 材制作グループ	(財)山口県国際交流協会 山口中央ロータリークラブ

2001	おいでませ山口1～外国人のための入門日本語教材～2002年版	JALT山口支部日本語教育部会	岩国日本語教室、(社)鳳陽会(注2)、山口県日本語教育ネットワーク
2001	おいでませ山口2～外国人のための初級日本語教材～2001-2002年版	JALT山口支部日本語教育部会	山口県日本語教育ネットワーク
2001	おいでませ山口3～外国人のための初級日本語教材～2002-2003年版	日本語クラブ山口教材制作グループ	(財)山口県国際交流協会 山口中央ロータリークラブ、山口西京ライオンズクラブ
2002	おいでませ山口2～外国人のための初級日本語教材～2002-2003年版	JALT山口支部日本語教育部会	(財)山口県教育財団・生涯学習活動グループ助成事業、(社)鳳陽会
2003	異文化交流の接点としての日本語教育—おいでませ山口1・2・3・4—	山口大学人文学部異文化交流研究施設	山口大学人文学部異文化交流研究施設研究プロジェクト
2003	おいでませ山口4～外国人のための初級日本語教材～2004年版	山口県日本語教育ネットワーク	(財)山口県教育財団・生涯学習活動グループ助成事業、(社)鳳陽会
2003	おいでませ山口2～外国人のための初級日本語教材～2004年版	山口県日本語教育ネットワーク	(財)山口県国際交流協会・グローバル山口民間国際交流促進事業
2005	おいでませ山口1～外国人のための入門日本語教材～2005年版	日本語クラブ山口教材制作グループ	山口市国際交流事業補助金・(社)鳳陽会・山口県日本語教育ネットワーク
2005	おいでませ山口3～外国人のための初級日本語教材～2005年版	日本語クラブ山口教材制作グループ	(社)鳳陽会
2006	おいでませ山口1～外国人のための入門日本語教材～2007年版	山口県日本語教育ネットワーク	(財)山口県国際交流協会・グローバル山口民間国際交流促進事業
2008	おいでませ山口3～外国人のための初級日本語教材～2008年版	日本語クラブ山口教材制作グループ	(社)鳳陽会
2009	おいでませ山口2～外国人のための初級日本語教材～2009年版	山口県日本語教育ネットワーク	(財)山口大学教育研究後援財団(注3)

(注1) JALT：The Japan Association for Language Teaching（全国語学教育学会）

(注2) 山口大学経済学部同窓会

(注3) 2008年12月現在制作中、2009年4月より頒布を開始する予定。

表1に示したように、1994年に制作されたB5版の『山口で学ぶ日本語—入門編—』および『山口県で学ぶ日本語—入門編—』、1995年制作の『山口県で学ぶ日本語—練習帳—』をもとに1996年に『おいでませ山口』、『続おいでませ山口』と改名・改編し、分冊化して発行された。その後1997年にA4版の『OIDEMASE YAMAGUCHIおいでませ山口—外国人のための入門教材—』と『続おいでませ山口—外国人のための初級日本語教材—』として改訂され、発行された。版形がB5からA4の大版になったことにより、絵や写真、図などが入りやすくなり、使い勝手がよくなった。

さらに1999年に『おいでませ山口1』『おいでませ山口2』と改名され、それに続く『おいでませ山口3』『おいでませ山口4』が発行された。『おいでませ山口1』に関しては、入門の学習者を対象に本文のダイアログにはローマ字を付けて、巻末にひらがなとカタカナの練習ページが付けられている。『おいでませ山口3』は主として待遇

表現を学ぶことが重点となっているが、その他には、「生活の中の漢字」「山口県の方言」「山口県立図書館」などのページが収録されている。『おいでませ山口4』は主として授受表現を学ぶことが重点となっているが、その他に封筒や年賀状の書き方、スピーチ・コンテスト出場の勧めや、日本の歌、日本の昔話、日本語能力試験と日本留学試験の情報などが収録されている。

2003年には、山口大学人文学部異文化交流研究施設研究プロジェクト助成制作物として『異文化交流の接点としての日本語教育—おいでませ山口1・2・3・4—』が発行された。4分冊構成となる『おいでませ山口』シリーズを一冊にまとめた合本版である。

2008年現在『おいでませ山口』1～4の4分冊が発行されていて、学習者のレベルに合わせて、山口県内のボランティア日本語教室で使われている。現在、財団法人山口大学教育研究後援財団からの助成を得て、『おいでませ山口2』の改訂作業が進められている。

これまで、十年以上にわたって、たびたび改訂・改編がなされてきたが、その作業チームは固定されたものではなく、改訂時点、改編時点での実際のテキスト使用者を中心に構成されたワーキング・グループが担当してきた。主な作業チームのメンバーは、日本語クラブ山口と日本語クラブ宇部のメンバーである。

4、『おいでませ山口』の他からの認知

1994年に『山口で学ぶ日本語～入門編～』が発行され、それを改訂する形で『山口県で学ぶ日本語—入門編—』が出されたが、それは「地域で学ぶ日本語」として、縫部（2002）の『多文化共生時代の日本語教育』に紹介されている。

佐々木（1999）は、「ボランティア日本語教室における自主教材の役割」という観点から、広島県の『もみじ』、山口県の『おいでませ山口』、岡山県の『入門日本語』『初級日本語』『中級日本語』、鳥根県の『にほんごまるかじり』などの地域発の日本語教科書の特徴を比較、分析している。『おいでませ山口』は現在山口県内8教室で使用されている。

『月刊日本語』（2007年4月号）にも「こんなテキストが欲しい！オリジナル教科書を作りました」という記事で『おいでませ山口』が「地元の情報が満載で生活便利帳として使える」地域密着型のテキストとして紹介されている。たとえば、山口市と博多間のバスの実際の時刻表と料金表が載せてあるなど学習者のための実生活に役立つ情報も盛り込まれている。

朝日新聞(山口版)にも「外国人向け日本語教材『おいでませ山口』生活情報兼ね好評、

でもスポンサー集め苦労」(2006年4月6日)との評価と実情が記事にされている。

表1に示したように14年間で26回の改訂を続けてこられたのも、14団体からの財政的なサポートが得られたからで、『おいでませ山口』シリーズの発行に賛同し、内容と意義を認知してもらっている証とも言えるであろう。テキスト使用者のボランティア組織だけで独自に発行し続けることができれば、それに越したことはないかもしれない。しかし、その一方では他者からの認知を得て、周りから支えられて発行を維持していくことも地域の日本語教育への理解とサポート態勢を創っていく上で大事だと思われる。

『おいでませ山口』は、学習対象の特定化、学習領域の特定化を迫っている。それは、ローカルテキストの特色であり、宿命でもあるが、学習者が限定されることから、いわゆる教科書会社としては採算の面からローカルテキストには手を出せないのが実情であろう。教科書会社に期待できない以上、ローカルテキストの作成は、地域社会のサポートを得て作成するしかない。

山口県の地域性にこだわるどころから逆に世界への広がりを目指すとの願いから、書名も『おいでませ山口』とし、山口県での外国人学習者を歓迎する意味が込められている。

5、地域方言とローカルテキスト『おいでませ山口』

山口県で作成されたローカルテキスト『おいでませ山口』というと山口県の地域方言の習得を目的とするための教科書と見られがちである。しかし、あくまで全国共通語を中心に本体のテキストが構成されており、付録として地域方言を解説しているか、関係する課に方言解説の頁が含まれているのが実態である。方言解説の頁配当は次の表2に示すように各分冊とも総頁数に対して数パーセントにすぎない。

表2 『おいでませ山口』における方言解説ページの割合

分冊 \ 頁配当	総頁数	方言解説	比率 (%)
おいでませ山口1	154	5	3.2
おいでませ山口2	149	7	4.7
おいでませ山口3	100	3	3.0
おいでませ山口4	135	2	1.5
合計	538	17	3.2

確かに、日本語の初学者にとって、全国共通語を習得するのが精一杯で、地域方言まで学習するゆとりがないかもしれないが、『おいでませ山口』の分冊が進むにした

がって地域方言を扱うページが増えてもよさそうに思われる。

地域方言を扱う比率を増やせない理由として以下のような点が考えられる。

- ① 基礎・基本は全国共通語におくべきで、地域方言を習得しても使用範囲が限られてしまう。また、そう考える日本語ボランティア・スタッフが多数を占める。
- ② ボランティアの日本語教室は、週一回二時間程度であり、地域方言まで学習範囲を拡大する時間的余裕がない。
- ③ たとえ方言を学ぶ時間を捻出できたとしても、教える側が必ずしも山口方言話者とは限らず、自信をもって教えることができない場合がある。
- ④ 山口方言といっても一色とは限らず、山口県内の地域による差が認められる。また、同じ地域でも年齢層によって、使う・使わない、わかる・わからないの差がある。
- ⑤ 学習者の中には、積極的に山口方言を習得したいと思っている意欲的な人もいるが、中には必要最小限のサバイバル日本語だけを習得すればいいと考えている人もいる。

6、日本語教育の独自性について

日本語を教えるボランティアには、日本語教育に関してはあまり予備知識がない人が含まれている。しかし、日本語教科書には、「い形容詞」「な形容詞」や動詞の「1グループ」「2グループ」などの専門用語が用いられているため、戸惑うことがある。ボランティアは、従来の国語教育で育っているため、日本語教育の専門用語が頻発すると圧倒されてしまう。国文法の「終止形」と「連体形」にあたる形が日本語教科書では「辞書形」となるのは、ある程度わかりやすいとしても、「五段活用動詞」を「1グループ」、「一段活用動詞」を「2グループ」とするあたりは、混乱する点であろう。外国人に分かりやすく、「テ形」(国文法の連用形+助詞「て」の形)「タ形」(国文法の連用形+助動詞「た」の形)「ナイ形」(国文法の未然形+助動詞「ない」の形)「マス形」(国文法の連用形+助動詞「ます」の形)などとしている活用形の名称とその有効性についても確認しておく必要がある。「食べて」「食べた」「食べます」がすべて連用形とされたのでは区別しにくいし、「食べる」が終止形にも連体形にもなることから「辞書形」とすることなどが特徴的である。

6-1、日本語教科書で難しいと感じる用語

日本語ボランティア養成講座での受講者からの感想としては、次のような声が聞かれる。

- ① 1グループ、2グループのところが今ひとつ分かりにくい。
- ② 動詞の1グループ、2グループときいても、すぐにどんなものだったのか思い出すのに時間がかかる。
- ③ 動詞のグループ分けをすることが外国人に日本語を教えることにどう役立つのかわからない。

「五段活用の動詞」を「1グループ」として、「一段活用の動詞」を「2グループ」とするあたりは、日本語教育の創設期に国文法を簡便にわかりやすく外国人学習者に提示しようとネーミングされたものであろう。それが、日本語教育の入門者にとっては、戸惑いを感じる点でもある。また、国語教育との差別化をはかり、日本語教育の独自性を強調するという観点から、現在に至るまで用いられてきた類別の仕方であるが、近年、日本語教育と国語教育の歩み寄りの必要性が説かれている中で、見直されるべき点でもある。

外国人学習者にわかりやすいかという点では、どうであろうか。漢字で表記するか、カナで表記するかといった問題は別として、次のような観点から、「1グループ」「2グループ」とするより、「五段動詞」「一段動詞」として示したほうがわかりやすいと思われる。

- ① 学習者の大多数を占める中国系の学習者、または漢字圏の学習者にとって、「五段動詞」「一段動詞」の方が活用実態を表しており、理解しやすい。また、本国ですでに「五段動詞」「一段動詞」と習ってきている学習者に、あらたに「1グループ」「2グループ」という区分名を教える必要性が乏しい。
- ② 「五段動詞」「一段動詞」より「1グループ」「2グループ」のほうが、欧米系の学習者、または非漢字圏の学習者にとって、馴染みやすいだろうとの判断があると思われる。しかし、英国人学習者が本国で「1グループ」の動詞を[five-step verb]と習ってきたと言っており、むしろ「五段動詞」とした方がわかりやすいと思われる。
- ③ 同じ1という数字がつくことから、「1グループ」の動詞が「一段活用の動詞」であるとの勘違いが生じる恐れがある。日本人にも起こりうる勘違いである。
- ④ 教える人によっては、活用の負担の少ない「2グループ」の動詞から先に教えて、次に「1グループ」の動詞を教えた方がよいと説く人もいる。そうすると動詞の「1グループ」と「2グループ」という順序性が逆となってしまう。

そもそも動詞の「1グループ」と「2グループ」という命名は、圧倒的に五段動詞が多いのに対して一段動詞や不規則動詞の数は少ないことによると思われる。『おいでませ山口』1～4に限っても、次の表3のような出現数の差となっている。次の表3に示したように、『おいでませ山口』1～4に出現する動詞の総数は223で、その64.6%にあたる144が五段動詞となっている。五段動詞と一段動詞の比率は、約7対3となっている。そもそも比率の多い動詞の方が、学習者が日常的に接する度合いも多いであろうとの判断から、「1グループ」「2グループ」という順序性がある命名となったのであろう。

表3 『おいでませ山口』1～4の動詞（新出動詞の数）

分類 分冊	1グループ 五段動詞 u-verb	2グループ 一段動詞 ru-verb	3グループ 不規則動詞 irregular verb	合計
おいでませ山口1	29	16	4	49
おいでませ山口2	31	11	3	45
おいでませ山口3	28	7	6	41
おいでませ山口4	56	25	7	88
合計	144	59	20	223

『おいでませ山口』も動詞のマス形から入り、テ形の作り方を導入する際に動詞のグループ分けを第一分冊で提示している。

日本語教育がすでにある程度社会的に認知されている現在、さらに日本語教育のすそ野を広げる意味においても、国語教育の方に歩み寄って動詞の「1グループ」と「2グループ」というネーミングから「五段動詞」と「一段動詞」に統一してはどうか。

「動詞の1グループ、2グループときいても、すぐにどんなものだったのか思い出すのに時間がかかる」という声は、動詞の活用実態とネーミングの間に敷居が一段高く設けられているためである。電池の大きさを「単1形」「単2形」「単3形」やコピー用紙の「A3」「A4」「A5」と言われても、大中小の区別が判別しにくいのと似ている。

6-2、「い形容詞」と「な形容詞」

「い形容詞」「な形容詞」という言い方も日本語教科書に出てくる。「い形容詞」は、大きい、小さい、忙しいなど国文法でも「形容詞」と呼ばれているもので、違和感はないだろうが、きれい、有名、静かなどいわゆる「形容動詞」を「な形容詞」と呼ん

でいるところが、日本語教育らしいところである。国文法で「形容動詞」という言い方は、一般的であろうが、「継続動詞」「瞬間動詞」などの列に並んでいると、動詞の一種類として「形容動詞」というものが存在するかのような誤解を外国人学習者に与えかねない。辞書の見出し語としては「きれい、有名、静か」としか示されていないが、「な」を介して名詞（体言）を修飾する（＝形容する）機能が主要な語なので「な形容詞」との呼称には、合理性がある。

羅（2003）は、ナ形容詞の文章中での使用特徴を調査しているが、「～な」「～に」「～で」「～だ」の順で出現頻度が少なくなっており、副詞的用法よりも形容詞としての機能が大きいと言える。『おいでませ山口』1～4の形容詞類の出現数（異なり語数）は、次の表4になる。「い形容詞」の方が「な形容詞」よりも倍の出現数となっている。「い形容詞」と「な形容詞」の区分は、日本語学習者と教える側の双方に混乱することなく受容されており、合理的な名称として支持されていると思われる。

表4 形容詞類の出現数（異なり語数）

分冊 \ 形容詞分類	い形容詞	な形容詞	合計
おいでませ山口1	29	12	41
おいでませ山口2	19	7	26
おいでませ山口3	10	6	16
おいでませ山口4	6	6	12
合計	64	31	95

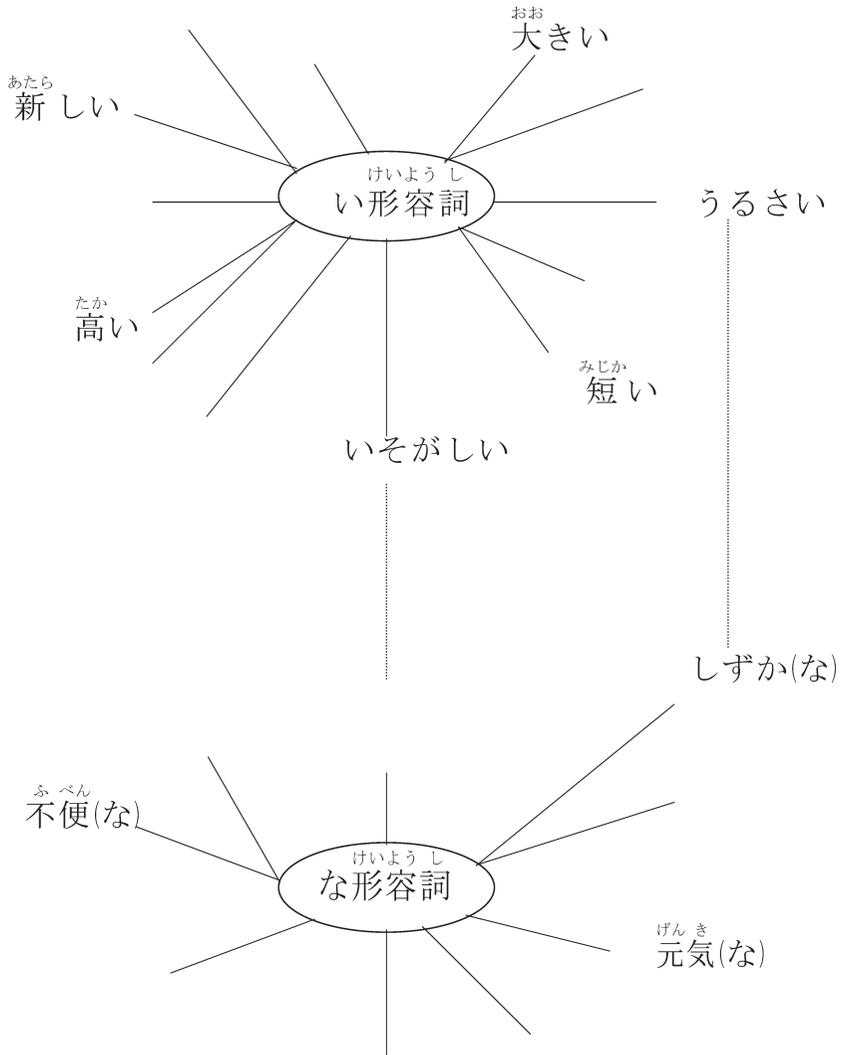
『おいでませ山口1』の第6課には、次ページに示すような「形容詞マップ」が掲載されており、学習者がそれぞれ「い形容詞」と「な形容詞」を書き込むようになっている。そういった活動を通して、一見「い形容詞」に見える「きれい」「嫌い」「大嫌い」などは、「な形容詞」に属し、「大きな」「小さな」「おかしな」など一見「な形容詞」に見える言葉は、連体詞として別枠であることをチェックできる。そのような点は、外国人学習者だけでなく、日本人も間違いやすい点である。

（以上、表2～4は、梶村・林（2008）「地域方言と日本語教育方言について」より）

イ形容詞は、国文法ではク活用の形容詞とシク活用の形容詞とに区分される。初級段階では、ク活用とシク活用の区別を学習者に教える必要はない。しかし、直接教授法によって教える場合、より具体的なものから抽象的なものへ、より客観的なものから主観的なものへという順序性を持っていったほうが教えやすいので教える側の知識としては、おさえておいたほうが良いであろう。（注1）

けいようし 形容詞マップ

けいようし
形容詞を できるだけ たくさん 書いてください。
Write adjectives as many as you can.



Vocabulary
adjectives (形容詞・けいようし) 元気(げんき)(な) energetic

7、今後の課題

もともと『おいでませ山口』は「相互のコミュニケーションの必要性」を前提とする「コミュニケーション・アプローチ (Communicative Approach)」を目指して作成された。名柄ら (1990) の『Japanese for Everyone』を参考にし、概念機能シラバスを採用している。

ここでは動詞の「1グループ」「2グループ」「3グループ」というネーミングを用いずに、五段動詞、一段動詞、不規則動詞というグループ分けを採用することを強く提案したい。そうすることによって、教える側と学ぶ側双方の混乱を回避でき、文法説明のスペースと時間を削減できると思われる。それは、山口県でのローカルテキスト『おいでませ山口』の制作にとどまらず、他の地域でのテキスト作りや新しいコンセプトでのテキスト作りにおいても同様のことが言えるであろう。

これからの来るべき多文化共生社会において、市販教材だけでなく地域に密着した日本語教科書づくりが今後ますます必要になるとと思われる。地域の実情に合った、地域情報満載の教科書が学習者から支持されると確信する。

現在、『おいでませ山口』の有料配布を検討するぐらい財政は厳しいが、財政的なゆとりがあれば、次のような改良、改善、修正、変更などが考えられる。

- 1) 情報として古くなっている部分の刷新、地域の実情を反映していない部分の見直し
- 2) イラストや絵、写真を含む全ページの電子化
- 3) 音声教材、DVDなどの映像教材化

これから地域で教材を作る人に助言を求められたら、次の点をあげたい。

- 1) あまり欲張らずに学習者が消化できる分量にスリム化する、分冊化する
- 2) 方言の扱いは強制的にならないように選択的な配慮をする（読み物ページ的な扱いにするなど）
- 3) 教える側よりは、実際に使う日本語学習者の使い勝手を優先する

以上の諸点は、『おいでませ山口』製作者側の今後の課題でもある。

(注1) 詳しくは、大野晋著 1978『日本語の文法を考える』(岩波新書)を参照していただきたいが、ク活用の形容詞は具体的、客観的、状態表現が特徴で、シク活用の形容詞は、抽象的、主観的、情意表現が特徴である。次の表で①②③④の数字は『おいでませ山口』の分冊の番号を、() 内に出現語数を示している。ク活用が50語であるのに対して、シク活用は13語である。初級段階では、ク活用の形容詞のほうが、シク活用の形容詞より優先されている。中級や上級では、シク活用の形容詞の学習が目標となるであろう。

ク活用	シク活用
①大きい、小さい、長い、短い、高い、安い、古い、黒い、白い、赤い、青い、黄色い、きたない、うるさい、おもしろい、遠い、いい、暗い、暑い、冷たい、痛い、寒い、暖かい (23) ②危ない、近い、狭い、速い、軽い、重い、広い、熱い、暗い、明るい、(本が) 薄い、多い、少ない、辛い、欲しい、苦い、むし暑い (17) ③若い、遅い、(背が) 高い、(背が) 低い、眠い、甘い (6) ④カッコいい、かわいい、気持ちがいい、強い (4)	①新しい、忙しい、難しい、おいしい、楽しい、うれしい (6) ②優しい (1) ③恥ずかしい、うらやましい、悲しい、涼しい (4) ④珍しい、おかしい (2)

【参考文献】

- 佐々木史 (1999) 「ボランティア日本語教室における自主教材の役割」 全国語学教育学会山口支部発行『山口支部研究紀要』第5号、146-162頁
- 縫部義憲編著 (2002) 『多文化共生時代の日本語教育』 瀝々社
- 梶村知美・林伸一 (2008) 「地域方言と日本語教育方言について—日本語テキスト『おいでませ山口』を検討材料にして—」 山口大学人文学部言語文化学科日本語文化論コース 林伸一研究室発行『現代日本語文化論』第1号
- 羅蓮萍 (2003) 「非『的』ナ形容詞と『的』付きナ形容詞の文章中での使用特徴の比較」 山口大学人文学部国語国文学会発行『山口国文』第26号、109-124頁
- (財)まね国際センター(1996) 『にほんごまるかじり～しまねで学ぶ日本語～』
- (財)ひろしま国際センター(1994) 『ひろしまで学ぶにほんご もみじ』 広島県名柄迪監修 (1990) 『Japanese for Everyone』 学習研究社
- 山口県日本語教育ネットワーク (2007) 『おいでませ山口1—外国人のための入門日本語教材—』 (平成18年度 山口県国際交流協会補助金による制作物)
- 山口県日本語教育ネットワーク (2003) 『おいでませ山口2—外国人のための初級日本語教材—』 (平成15年度 山口県国際交流協会補助金による制作物)
- 日本語クラブ山口 (2005) 『おいでませ山口3—外国人のための初級日本語教材—』
- 山口県日本語教育ネットワーク (2006) 『おいでませ山口4—外国人のための初級日本語教材—』